

「音楽総合研究」におけるポピュラー音楽理論の学習と実践 —学習の現場を通して—

赤松 英彦

Hidehiko AKAMATSU

1. はじめに

現在、学校など教育の現場はもとより、音楽を志す者にとってポピュラー音楽に関する知識は必要不可欠なものとなっている。さまざまな音楽シーンで、クラシック音楽だけでなくポピュラーやジャズ、コードネームなどにも精通した音楽力を求められる場面も増えている。

本学、「音楽総合研究」の授業ではソルフェージュ、楽典などクラシック音楽の基礎知識を学習すると共に、コードネームを中心としたポピュラー音楽理論の学習や編曲の要素などを取り入れ、独自の授業を行っている。昨年度の授業を振り返り、授業で実践した事例をもとにソルフェージュ、音楽理論、コードネーム、演奏表現などを総合的に学習する手法について考察していきたい。

2. 学生の実態と授業の概要

「音楽総合研究」授業は本学に開設されている音楽総合専修の必修授業である。音楽総合専修は音楽を基礎から幅広く学べる専修であり、学生の専門楽器も鍵盤楽器から声楽、管楽器と多岐にわたる。授業では楽典やソルフェージュなど音楽基礎力の強化と共に、コードネームなどベーシックなポピュラー音楽理論を合わせて学習している。年度により履修者数や学生の音楽レベルもまちまちであるため、クラスごとに学生に対応した授業内容を工夫し授業を展開している。昨年度2年生の履修者は専門楽器がピアノの学生2名であった。2名ともある程度ピアノの演奏テクニックもあり、音楽理論などの理解度レベルも比較的高い学生であったため、やや高度な内容で授業を進めることができた。特にポピュラー音楽理論については、コードネームの学習だけにとどまらず、学習した内容の応用として、前期はJ POPを題材に、弾き語り音源から音を取り楽譜を作成する、所謂「耳コピー」を実践し、ピアノ伴奏楽譜の作成とピアノによる弾き語りを行った。また後期には集大成として、オーケストラによるCD音源から音を拾い、最終的にピアノ連弾用に編曲し楽譜を作成、演奏と録音までを行った。また、ブルースコード進行とブルーノートスケールによるアドリブの経験を含むジャズへのアプローチなども取り入れた。

3. ソルフェージュ、楽典

ソルフェージュについては今回、聴音のトレーニングに重きを置いて学習した。基本トレーニングとして単旋律聴音から始めて、複旋律聴音、2声和声聴音、3声和声聴音、4声和声聴音へと進めていった。学生はそれぞれソルフェージュの授業は受講しているが、あらためて楽譜の書き方や音を取るためのコツ、留意点などについても細かく学習し、かなりソルフェージュ力を高めることができた。更に和音の響きから和音の種類を聞き分ける、和音判別聴音等も並行して行った。和音種別の聞き分けでは、コードネームや楽典の内容にも触れながら、それぞれ関連性を持たせながら授業を進めることで、より学習効果が高まったと感じている。更にCD音源からの音取り（耳コピー）への準備として、電子楽器音源で作成した音色の色彩感を伴う聴音課題やポピュラー音楽系の課題なども取り入れ、新しいスタイルの聴音トレーニングを行った。金管や木管、ストリングスなどの音色に加え、ドラムパートやベースパートなどを含む音源の聞き取り等も積極的に取り入れた。より生音に近い音源からの聴き取りは、CDコピーの実践的なプレトレーニングとして、音を集中して聴く事への意識を高めるこ

とに役立った。またそれぞれタイプの違った聴音課題の経験は聴音学習の単調さを補うと共に、さまざまな角度から音を聴くための足がかりとして非常に有効な手段であった。

表1 聴音課題の種類

旋律聴音	単旋律課題、対位旋律課題
和声聴音	2声和声聴音、3声和声聴音、4声和声聴音
和音判別聴音	長3和音、短3和音、減3和音、増3和音、減7和音
電子楽器音源課題	音色の色彩感を伴う課題、(ポピュラー系課題含む)

4. ポピュラー音楽理論学習と実践

4-1 コードネーム

ポピュラー音楽理論の学習はコードネームの理解から始め、ベーシックなコードプログレッション理論へと発展していけるよう工夫し、単に理論の理解だけでなく、それぞれのコードの特徴を音として感じ取ることを大切に解説した。またポピュラー音楽におけるテンションコードの重要性やボイスイングによる響きの違いについても具体的にサウンドを示し、実際に和音の持つ色彩を感じながら学習することを心掛けた。

ここでは響きや独特の緊張感や響きの魅力を肌で感じられるよう、特に難解な捉え方とならないよう配慮して解説した。

表2 コードネームの種類

3和音	C、Cm、C+、Cm-5、
4和音	C7、Cm7、C6、Cm6、Cdim、CM7、CmM7、Cm7-5
テンション	9th、 \flat 9th、 \sharp 9th、11th、 \sharp 11th、13th、 \flat 13th、

4-2 ベースラインとカウンターライン

コード理論の応用課題としてのベースラインとカウンターラインについては、一般的に良く行われる学習法である。ここでも授業では和声学とも関連づけながら、単に五線上のパズルにならないよう、音出しの実践を交えながら解説を行った。更に、JPOPや映画音楽など実際の音楽の中でのベースラインやカウンターラインの使われ方について、音源を分析しながら学習した。

4-3 ピアノによる伴奏付け、弾き歌い

またコードネーム理解をより深めるため、即興演奏の基礎ともなるピアノを使った伴奏付け、弾き歌いなどへの応用についても触れ、応用力の強化にも力を入れて指導を行った。ピアノによる伴奏付けでは、メロディーを弾きながら伴奏をする場合のボイスイング、メロディーを含まない場合のボイスイングの違いなど、同じコードでも押さえ方のバリエーションを持たせることで、より多彩な表現が可能になる点にも触れ、実践的力をつける事にも留意した。更に移調奏のトレーニングにより調性に慣れ色々なコードに触れることで、柔軟性のある音楽力を養う事に役立った。移調奏ではシンプルなカデンツの移調から始めて、バッハインヴェンションなど難易度の高い課題にも取り組んだ。

表3 コードネームによるピアノ伴奏

メロディーを含む伴奏	右手メロディー、左手だけで伴奏する伴奏型
メロディーのない伴奏	両手でコード伴奏をつかむ伴奏型
移調奏1	C-F-ConG-G7など、シンプルなカデンツの全調移調
移調奏2	バッハインヴェンション1番の移調、D、 $B\flat$

4-5 ジャズへのアプローチ

コードネームの基本知識を発展させる形で、ジャズミュージックの基本ルールや成り立ちについて学び、更に「Cジャムブルース」を題材として、ブルースコードとブルーノートスケールを使用したジャズのアドリブの実習を行った。アドリブの体験は即興演奏に不慣れの学生にとっては未知の領域であったが、回数を重ねるうち少しずつ自然で魅力的なフレーズを作れるようになっていった。楽譜の束縛から離れ自由に演奏することは、学生にとっても新鮮な体験であったようだ。また、ジャズプレイヤーによる「Cジャムブルース」演奏音源を聴きながら、クラシック音楽にはないジャズ独特のフィーリングやノリ、グルーブ感などについてもレクチャーしながら授業を進めた。

5. CDコピー（耳コピー）の実践と編曲および楽譜作成

学習したことの集大成として、学生自らCDコピー（耳コピー）によりオリジナル楽譜を作成し、更に演奏と録音を行った。今回初めての試みとして行った生の音源から音を拾うことやピアノへの編曲は、学生にとっても聴音課題とは違う新鮮な経験であったようだ。単純に音やリズムを聴き取るだけでなく、音楽としての表現やゴーストノートのポピュラー音楽独特の細かいニュアンスにも留意しながらの作業はかなり難易度の高い内容であった。そのことは音楽をさまざまな角度から分析し、理論と照らし合わせながら総合的に音楽を捉えるために、大変効果的であったと感じている。曲に対する理解と共に、音楽理論についても更に掘り下げて理解を深めることができた。

前期は、「松任谷由実、卒業写真」ライブ音源を題材に、ピアノソロ伴奏による弾き語りを行った。時間をかけ反復して音源を聴くことで学生自ら、音楽の中から色々なことを発見することができた。音が聴き取りにくい場合、理論的な観点から音を想像したり、前後関係から音を割り出す手法など、聴音では学ぶことのできない音の拾い方についても学び、学生もそれなりの手応えを感じていたようである。

後期は更に難易度の高いオーケストラによる音源「服部隆之、JUSTIS FOR ALL」を、ピアノ連弾のために編曲するトランスクリプションに取り組んだ。ここではピアノとは違う色彩感を持ったオーケストラのサウンドに触れる事で、オーケストラ楽器の音色や奏法、またそれぞれの楽器の持つ多彩な表現など、またピアノとは違った音楽の魅力を再発見し、幅と奥行きのある音楽力を養うことができた。繰り返し音源を聴く中で、学生がオーケストラの楽器や音楽をより身近なものとして感じ、興味を深めることができたことも、教育的に大きな効果があった。またピアノ連弾用の編曲にあたっては、楽譜への表記の仕方や、より読みやすい楽譜の書き方など、音楽の現場で役立つ実践的な知識を習得できた。特に細かいアーティキュレーションやダイナミクスの記譜の仕方については、あらためて音楽表現や歌い方について見つめなおす良いきっかけとなった。

最終的に自らが編曲した楽譜を演奏し、CDに録音することで学生の充実感や達成感もより大きなものとなった。またCDの音を確認する中で発見できたことも大きな収穫であった。

表4 ポピュラー音楽理論

1. コードネーム
2. ベースライン
3. ブルーノートスケール、ブルースコード、アドリブ

表5 ポピュラー音楽理論の実践

1. ピアノ伴奏
2. 弾き歌い
3. 移調奏
4. アドリブ実践
5. CDコピー（ピアノによる弾き語り）
6. CDコピー（オーケストラ音源からのピアノ連弾へのトランスクリプション）

6. まとめ

ソルフェージュや音楽理論、コードネームなどの学習について「音楽総合研究」での授業内容を中心述べてきた。ここでは音楽理論の学習と、その応用としての実践を交えながら授業を展開してきたが、このような形態での授業展開は私にとっても初めての経験であった。

理論と実践により、学生の音楽理論への興味も高まると共に、理解度についても向上できたと感じている。また指導者としても、ある手応えを感じることができた。しかし履修者数の多いクラスや学生の音楽レベルの大きい場合の対応や授業の進め方など、残された課題も多い。近年、音楽理論に対して苦手意識を持つ学生が増えている。今後も多様化する学生のニーズに応えられるよう、解りやすい授業、魅力ある授業の展開について更に研鑽を深めていきたい。

参考文献

- 1) GORDON DELAMENT ARANGING and COMPOSING (1983)
- 2) HENRY MANCINI SOUNDS AND SCORES (2003)
- 3) 松田 昌 ポピュラーアレンジの基礎知識 (1986)